

資料紹介

松平春嶽の紀行文「東海紀行」

堀井 雅弘*

はじめに

1. 天保15年の参勤と交代
2. 天保15年の交代の紀行文
 - (1) 松平文庫「東海紀行」
 - (2) 福井市春嶽公記念文庫「天保甲辰東海紀行」
 - (3) 福井市春嶽公記念文庫「甲辰帰国東海道駅路紀行草稿」

おわりに

はじめに

福井県文書館では、閲覧室内に展示スペースを設け、「月替展示」という小展示を開催している¹⁾。月替展示は、2か月ごとにテーマを変更し、テーマに応じて既設の展示ケース内の資料を入れ替えるという展示である。その月替展示の平成29年1・2月のテーマが、「参勤交代」であった²⁾。

福井藩が管理していた資料は、福井県立図書館で保管されている「松平文庫」³⁾、福井市立図書館で所蔵されている「越國文庫」⁴⁾、福井市立郷土歴史博物館で所蔵されている「福井市春嶽公記念文庫」⁵⁾、そして同館に寄託されている「越葵文庫」⁶⁾と、3館で分蔵、かつ4資料群に分立する形で現在に伝えられている。このうち、「松平文庫」の中に2点⁷⁾、「福井市春嶽公記念文庫」の中に14点⁸⁾、あわせて16点の参勤交代にまつわる紀行文体・日記体の資料がある。これは、松平文庫の2点を含めた16点すべてが、松平春嶽（慶永）⁹⁾代の資料である。

春嶽は、天保14年（1843）から安政4年（1857）¹⁰⁾までの間に16回、参勤交代で江戸・福井間を行き来している。上記の16点は、その16回のうち、天保15年（12月に弘化と改元）から嘉永6年（1853）までの間の10回と安政4年の1回、あわせて11回の参勤交代にまつわる資料で、道中での見聞や感想にふれながら、その道筋をたどり、制度に付随する旅をとおして福井藩の参勤交代を知る手がかりになる。1・2月の展示では、このうち、参勤交代としては3回目ながら、参勤交代の紀行文としては第一作目となる松平文庫「東海紀行」を借用し、道中でのエピソードなどをとり上げながら、当館所蔵資料（一部は寄託）を交えてその道筋をたどり、福井藩の参勤交代の一例として紹介した¹¹⁾。

春嶽といえば、幕末から明治維新にかけて、その変革期における藩内外での政治活動で、広く知ら

*福井県文書館古文書調査専門員

れている。しかし、この「東海紀行」は、それ以前の近世後期、天保15年の交代にまつわる資料である。天保15年の交代当時、春嶽は16歳で、しかも、前年に初入国したばかりであった。その春嶽による紀行文である「東海紀行」には、率直な意見や新鮮な感想が記されており、また、時には思いや考えも語られている。そして、そこからは、雷におびえ、家臣の祖先の功によるこび、供の疲れを案じて観光を我慢するなど、春嶽という人物の意外な一面も見えてくる。

本稿では、青年藩主春嶽による参勤交代の紀行文「東海紀行」（本誌巻末に松平文庫「東海紀行」の翻刻を掲載）を読み進めるための一助として、その成立や位置づけを検討していく。

1. 天保15年の参勤と交代

文政11年（1828）年9月に田安德川家当主徳川^{なりまさ}斉匡の8男として誕生した春嶽は、天保9年（1838）10月に田安德川家から福井藩主松平家に養子入りし、先代^{なりさわ}斉善の家督を相続している。しかしながら、諸藩の藩主や世子は、「江戸置邸妻子収容の法」により、17歳になるまでは入国が許されなかったため¹²⁾、福井藩主松平家に入った春嶽もまた、江戸城田安門内の田安德川家の屋敷から常磐橋門内の福井藩主松平家の屋敷に移った後は、そのまま江戸に居住していた。

天保9年10月当時、春嶽は11歳であった。そのため、同15年が初入国の年となり、それからさらに6年の月日をまたなければならない。ところが、春嶽はその前年、同14年6月10日に初入国している（5月19日江戸発、日光東照宮・東海道経由）。これは、さらにその前年、同13年9月に願い上げ、同年11月に「此度限り格別之詔を以」て許された初入国であった¹³⁾。

福井藩の参勤交代は、3月発・4月着の参勤に4～5月発・5月着の交代が通例となっていた¹⁴⁾。天保14年の初入国は、通例からひと月遅れの6月着であるが、それも複数回の先例がある。そのため、以降は、翌年の3～4月にかけて参勤、翌々年の4～5月にかけて交代というサイクルになるはずである。しかし、春嶽の初入国には9か月という期限が設けられていたため¹⁵⁾、天保14年6月の初入国から約半年、翌15年正月13日にさっそく参勤し、福井を後にしている（同月27日江戸着、東海道経由）。そして、順年に戻すべく、その参勤から約3か月、同年4月29日に再び交代し、はやくも帰国の途についている（5月11日福井着、東海道経由）。

つまり、春嶽は1年の間に初入国、参勤、交代と江戸・福井間を一往復半し、初入国の翌年、同じ季節に同じ道をたどって交代しているのである。「東海紀行」は、このうちの交代、天保15年の交代の紀行文である。

2. 天保15年の交代の紀行文

(1) 松平文庫「東海紀行」

「東海紀行」（縦帳（全1冊、墨付22丁・遊紙2丁）、仮綴、外題は表紙の中央に直書き、内題は「甲辰東海紀行」（序文・本文）は、序文・本文・跋文という構成で、文章は最後まで書きとおされているものの、ほぼ全頁にわたって修正や訂正、加筆などが朱書きされている。また、原文自体にも、尊敬表現のためではない、おそらくは追記のためであろう欠字がある。このような仮綴という装訂、そして朱書きや欠字のある文章から、松平文庫「東海紀行」は、校正用の草稿と位置づけられる。そう

すると、朱書きを除いた原文は、さらに紀行文の初稿と位置づけられる。朱書きの多さから、その初稿は、紀行文としては未完成であろうが、朱書きによる変更が「残念なること也」（「かひなき事とおもふ」と修正）や「うれしくも存する也」（「奇異の事なり」と修正）といった春嶽の感情を含めた内面の表現にも及んでいるため、初稿であるからこそ見えてくるという春嶽の人間像もある。

校正の過程が追える朱書き、そして、朱書きを除いた原文から復元できる初稿、この二つが、校正用の草稿である松平文庫「東海紀行」の特徴といえる（以下、「東海紀行」の引用は、朱書きを除いた原文による）。

序文には、まず、前年の初入国から当年の交代までの経緯が記されている。そして、「無程発途せんとしける内に、筑山先生、当年は道の記かきて見せよとありしゆへ、愚文鈍筆を恥すしてかきとめぬ」（以下、「東海紀行」「少傳日録抄」「奉答記事」の読点と並列点は筆者による）と記し、執筆の理由を明らかにしている。この「筑山先生」は、幕府の奥儒者成島筑山（良讓、桓之助）である。

筑山については、御側向頭取による御用日記「少傳日録抄」¹⁶⁾の天保10年(1839)正月26日条に「成嶋邦之丞殿被出、大学三綱領御講積被申上、(中略)以来御定日一六ニ御極、昨日御用人の手紙ニ而御頼申達候事、但六ノ日御講積・一ノ日御復読」とあり、そして、その後の翌月1日条に「成島邦之丞被出、孟子一御復読被遊候、以後一ノ日定式御復読」とある。このように、筑山は天保10年2月より、1日の復習に6日の講義と月2回、常磐橋屋敷に出仕して、春嶽の勉学の指導にあたっていたようである。

天保10年正月当時、春嶽は11歳であった。「筑山先生」は、春嶽が少年期より教えを受けていた先生であり、こうした春嶽の筑山との関係は、上記の序文からうかがえるように、春嶽の初入国後も続いていた。そして、それは春嶽による日記『政事日録』¹⁷⁾の弘化2年(1845)7月18日条に「成島桓之助殿殿と書す事者、右筆部屋ニ而者御旗本をさして殿と書、此方被越候て、(後略)とあるように、遅くとも春嶽が17歳の時には、春嶽が自ら師弟と認める間柄であった¹⁸⁾。

春嶽は、明治14年(1881)に書き上げた随筆『真雪草紙』初編¹⁹⁾の中でも、「我師成島讓(桓之助号筑山、今柳北ノ父)毎々参邸講義あり。」と記し、筑山を師と仰いでいる。筑山は嘉永6年(1853)に死去しており、また、天保14年には春嶽の参勤交代もはじまっているため、春嶽が筑山から教えを受けていた期間は10年に満たない。しかし、それは少年期から青年期にかけての数年にあたり、人間形成において重要な時期であった。このように、春嶽にとって筑山は後年になっても忘れ得ぬ存在であり、「東海紀行」の成立には、その師筑山からの一年越しの「宿題」といういささか特殊な事情があった。

こうして執筆された本文には、4月29日(初日)、出発地の常磐橋屋敷から5月11日(最終日)、目的地の福井城までの13日間の参勤交代の日々が、一日区切りで記されている。具体的には、日本橋・品川間の「常磐橋屋敷」から東海道を南下、西進し、尾張国の「宮」で美濃路に入り(8日(10日目))、美濃国の「垂井」で中山道(9日(11日目))、そして同国の「関が原」で北国街道に入り(同日)、福井城まで北上するという経路と日割で、一日の出発から到着までの間の見聞や感想、そして道中所々の紹介などが、そのおもな内容である。しかし、見聞や感想、紹介といっても、見聞や感想は、時にそこから内面へと入り込み、紹介は、名所旧跡の解説から土地の風習、さらには出会った人

物や各地の名物まで、多種多様な情報を盛り込んであるため、その内容は変化に富んでいる。このような自身の内面や豊富な情報を織り交ぜた文章からは、春嶽なりに他見を前提とした紀行文のあり方を考え、私的な日記や単なる記録ではなく、紀行文体の「作品」として、意識しながら執筆しているようすがうかがえる。

跋文は「五月三日のしのゝめ、かん原のやとりをたちて、御さきへまいる」という書き出しではじまっており、ここで序文・本文から視点が変わる。そして、その文末には「成昂上」とあり、「わか君の、千代をそいのる、いハきやま、みちさへやすく、こえきませとて」という短歌で締めくくられている。本文中で春嶽は、文中に記した「千貫樋」の由来を「加賀成昂の言ニ依て初てしる故、こゝに記す」（5月2日）と明かし、また、その翌日の文中に出てくる磐城山の別名「薩埵峯」の由来も「臣成昂か文あれハ、是に譲りぬ」（3日）と記している。「成昂」は、この「加賀成昂」（九郎右衛門、天保15年当時は御小姓頭取）²⁰⁾であろう。

成昂については、中根雪江（靱負）^{ゆきえ}が、明治9年に書き上げた旧主春嶽の伝記『奉答紀事』の中で、次のように記している。

（前略）（筆者注：天保9年（1838）、執政の一人、岡部左膳が）御側向にて文字の心懸ある桑山彦助・加賀藤七郎^{後、九郎右衛門}などを御相伴とし、御素読・御復読にも侍らし、又、日々朝御膳中にハ、必御側向又ハ御医師共にて、明君賢主の言行を記せし書類を読ましめ給ふ事始まれり。^{此等代にも²¹⁾}

（前略）此頃（筆者注：天保10年11月18日）、御近習番加賀九郎右衛門を御小姓に被仰付たり。此者、程朱学を奉し、精忠無双の志士なりけれハ、己か文筆の才に任せて画もかきたれハ、さま―に心を尽し、色々の物かきて奉りなとして、面白くをかしく御相手仕り、同僚の石原甚十郎^{壽正}・桑山彦助など、心を合せて、輔導し奉る事とハなりけり。（後略）²²⁾

このように成昂は、春嶽が福井藩主松平家に養子入りし、家督を相続した天保9年より、心を尽くし、工夫を凝らして、学問の相手を務めていたようである。当時、福井藩は先々代^{なりつぐ}齊承に先代^{なりさわ}齊善と2代続けて藩主が若年で急逝していたため（齊承は25歳、齊善は19歳）、体制が安定せず、さらに借財が積み重なっていた上、天保の大飢饉にも見舞われるなど、財政を中心として課題が山積しており、藩政運営は困難な状況にあった。しかし、そのような中であっても、当時の御側御用人や御側向頭取は、新藩主春嶽の教育方針を改めず、物入りな茶・歌舞伎・插花などの遊事をすすめていたという²³⁾。この石原甚十郎、桑山彦助、そして成昂らによる訓育は、時勢に応じて、藩政の流れを転換するための第一歩であったといえよう。

跋文のとおり、成昂も天保15年の交代で、春嶽に従って江戸から福井へと戻っている。前述のとおり、「東海紀行」は、江戸の筑山に提出するための福井での春嶽の「宿題」であった。しかし、本文からうかがえる春嶽との関係や天保15年の交代の一員であったという状況から、この成昂が「東海紀行」の執筆や朱書きに関わっていたという可能性は、十分に考えられるであろう。

ところで、この「東海紀行」は、序文の文末に「皐月 春嶽」とあるのみで、本文と跋文には奥書

がない。到着月にあたる序文の「皐月」と詳細な本文の記述から、少なくとも序文は天保15年5月、11日の福井到着後、同月中に執筆されたといえ、本文と跋文も序文と日を経ずして執筆されたと考えられるが、朱書きは人物も、そして時期も未詳であるため、校正用の草稿としての役目を終え、校了した時期は明らかでない。

(2) 福井市春嶽公記念文庫「天保甲辰東海紀行」

「はじめに」で述べたとおり、福井市春嶽公記念文庫の中に14点の参勤交代にまつわる紀行文体・日記体の資料がある。そして、その中に松平文庫「東海紀行」と同年で、さらに同名の「天保甲辰東海紀行」²⁴⁾という資料がある。形態は「東海紀行」と同じ縦帳(全1冊、墨付28丁・遊紙2丁)であるが、装訂は袋綴で、書袋がある。そして、序文から跋文まで、文章には「東海紀行」の朱書きが反映されており、巻末には「右、弘化二年乙巳之春、奉命謹書之、臣高野進」という奥書がある。高野進(半右衛門)は、春嶽の下で御儒者や明道館教授を務めた福井藩の儒者である(当時は御儒者見習)²⁵⁾。このような袋綴に書袋という装訂と朱書きが反映された文章、そして進による奥書から、「天保甲辰東海紀行」は、校正用の草稿「東海紀行」の完成稿であり、それを春嶽でも成昂でもなく御儒者見習であった進が、謹書した清書と位置づけられる。

ところで、この「天保甲辰東海紀行」の外題は松平文庫「東海紀行」と同じ「東海紀行」(題箋)で(内題も同じ「甲辰東海紀行」(序文・本文))、「天保甲辰東海紀行」という表題は、書袋の中央に直書きされており、意匠を凝らした枠線で囲まれている。そして、その左下には「敬臨館」とある。「敬臨館」は春嶽の号の一つである²⁶⁾。複本の可能性もあり、これを築山に提出したかどうかは未詳であるが、この書袋から、「天保甲辰東海紀行」は、春嶽の蔵書として保管されていたと考えられる²⁷⁾。

春嶽は、前出『真雪草紙』の第2編の中で、「是等ハ皆、於余忘るゝことなき恩人なり。」という「学問相手位也」として27人の名を挙げており、そこには筑山(「成島良讓」)・成昂(「加賀九郎右衛門」)・進(「高野半右衛門^{後教授}」)の3人の名も見える²⁸⁾。筑山は嘉永6年、成昂は弘化3年、進は安政6年(1859)と、この時、3人はすでに死去していた。そして、明治に入って久しく、成昂・進などは、その子との君臣関係も絶たれていた。それでも春嶽が「恩人」として記憶にとどめていた3人は、師に御小姓頭取に御儒者見習と、立場こそ違うものの、その中心には春嶽がいた。「恩人」という言葉からも、その人間形成に与えた影響は少なからざるようすがうかがえる。この天保15年の交代の紀行文「東海紀行」も、春嶽と筑山、成昂、進の三者との関係の上に成り立っており、春嶽とその3人によって作り上げられた成果物の一つであるといえよう。

(3) 福井市春嶽公記念文庫「甲辰帰国東海道駅路紀行草稿」

天保15年の交代のほか、弘化2年(1845)の参勤、同4年の参勤、嘉永元年の交代、そして同6年の参勤でも、別種、あるいは分冊という形で、2点の紀行文体・日記体の資料がある。しかし、天保15年の交代では、「東海紀行」と「天保甲辰東海紀行」との2点に加えてもう1点、福井市春嶽公記念文庫の中に同年の「甲辰帰国東海道駅路紀行草稿」²⁹⁾という資料がある。形態は小横帳(全1冊、墨付48丁、仮綴)で、表紙には「甲辰帰国、東海道駅路、紀行草創稿」(「創」には取り消し記号)、「従

江戸、至越前国)、そして「慎独齋(花押)」とある。「慎独齋」もまた、春嶽の号の一つである。

前述のとおり、「東海紀行」と「天保甲辰東海紀行」との間には、密接な関連がある。しかし、この「甲辰帰国東海道駅路紀行草稿」は、書名や形態だけでなく、構成も異なっており、「紀行」という内題に続いてさっそく本文が書きはじめられている。その本文は、日にちこそ「東海紀行」と同じ4月29日から始まっているが、常磐橋屋敷内での準備から出発までの部分は省略してある。そして、5月11日までの全13日間のところ、その前日の10日午後、中河内・板取間で「領分故記文ニ不記」とことわり、12日目の途中で本文を終えている。さらに、「東海紀行」や「天保甲辰東海紀行」とは、文体が異なる上、ほぼ全頁にわたって修正や訂正、取り消しが加えられており、書き損じもそのまま残されている。そして、「花水橋」(30日、平塚・大磯間)や「曾我五郎之鐘ためしの石」(5月1日、小田原・箱根間)、「箱根権現の本道と脇道」(同)というように、ところどころに図が挿入されている。このような小横帳という形態に加え、文章の筆づかいも一様ではないため、この「甲辰帰国東海道駅路紀行草稿」は校正用の草稿「東海紀行」の原稿、道中の覚書と位置づけられる。

この「甲辰帰国東海道駅路紀行草稿」と「天保甲辰東海紀行」、そして「東海紀行」から、春嶽は、天保15年の交代の紀行文を執筆するにあたり、4月29日の常磐橋屋敷出発から5月10日の藩領到着まで、覚書をとりながら道中を進み(「甲辰帰国東海道駅路紀行草稿」)、5月11日の福井城到着後、その覚書をもとに紀行文の草稿を作成し、あるいは加賀成昂などの協力を得ながら校正を進め(「東海紀行」)、翌年春の参勤前、校了を終えた完成稿を清書し(「天保甲辰東海紀行」)、「宿題」を完成させたと考えられる。

おわりに

序文に「当年は道の記かきて見せよ」とあるように、「東海紀行」は、春嶽にとって第一作目となる参勤交代の紀行文であった。その参勤交代、天保15年の交代は、参勤交代としては3回目も、江戸から福井への交代としては2回目で、「東海紀行」の文章からは、全13日間という長旅ながら、旅を楽しんでいるようすもうかがえる。

天保15年の交代にまつわる紀行文体・日記体の資料のうち、道中の覚書「甲辰帰国東海道駅路紀行草稿」では、記憶が新鮮なうちに綴られた文章、そして旅の最中を思わせる筆づかいから、春嶽の一人称視点でその道中を追体験することができる。また、紀行文の執筆が前提にあるため、これはその素材集と位置づけられ、紀行文を執筆するにあたっての道中での関心の置き方も探り出すことができる。

そして、校正用の草稿「東海紀行」では、朱書きをとおして校正の過程を追うことができ、また、朱書きを除いた原文から、紀行文体に改められながらも、いまだ素直な表現が残る紀行文としての初稿を復元することができる。

さらに、その完成稿「天保甲辰東海紀行」では、春嶽が考えた紀行文としての完成形を装訂まで含めた形で見てとることができる。

この3点の紀行文体・日記体の資料からは、来たる年、「筑山先生」に提出するために自身の手で素材を集め、紀行文体に直して校正にかけ、ようやく「宿題」を完成に至るという「東海紀行」の成

立の過程がみえ、藩主であり、青年であり、そして弟子であるという若き春嶽の姿が立ち現われてくるであろう。そして、その紀行文「東海紀行」からは、従来のイメージとは異なる、春嶽の新たな人間像が浮かんでくるであろう。

注

- 1) 年5回。なお、「月替展示」のほかに「企画展示」と「ミニ展示」という展示も開催している（前者は年1回、後者は不定期）。
- 2) 平成29年1・2月月替展示「青春17 春嶽の旅日記－「東海紀行」でたどる参勤交代－」（会期：平成28年12月23日（金・祝）～平成29年2月22日（水）、会場：福井県文書館 閲覧室）
- 3) 資料については、『松平文庫資料目録』（福井県立図書館、1968年）、および『松平文庫 福井藩史料目録』（福井県立図書館、1989年）参照。また、インターネットサービス「福井県文書館・県立図書館・ふるさと文学館デジタルアーカイブ」（<http://www.archives.pref.fukui.jp/archive/>）でも検索が可能（一部は閲覧も可能）。なお、原本の閲覧・撮影は、事前の申請と許可が必要。ただし、複製本の閲覧・複写は、事前の許可が不要で、文書館で利用が可能。
- 4) 藩校蔵書（国書・漢籍・英書・蘭書）。国書・漢籍については、『和漢古書分類目録』（福井市立図書館、1979年）参照。また、英書・蘭書を含めた文庫の一部は、福井市図書館ウェブサイト内のデジタル貴重書「越国文庫コレクション」（<http://lib.city.fukui.fukui.jp/archives/index.htm>）で閲覧が可能。
- 5) 藩主松平春嶽関係の資料群。資料については、『春嶽公記念文庫解説目録－文書編－』（福井市立郷土歴史博物館、1972年）、『同－什器編－』（同、1974年）、『同－追贈 什器・文書編－』（同、1975年）、および『同 文書編・什器編・追贈什器文書編－総索引－』（同、1976年）参照。
- 6) 歴代藩主の遺品や伝来の什宝、文書など。目録は未刊行。
- 7) 「東海紀行」（福井県立図書館資料番号273(仮95)、福井県文書館資料番号 A0143-20273・複製本番号 A5266）と「小柴之記」（福井県立図書館資料番号275(仮110)、福井県文書館資料番号 A0143-20275(複製本は未作成)）。なお、「小柴之記」は、平成25年に板橋区郷土資料館の企画展「地域史シリーズ いたばし」で展示されている（展示については、図録『地域史シリーズ いたばし』（板橋区郷土資料館、2013年）参照）。
- 8) 前掲注5『春嶽公記念文庫解説目録－文書編－』8～12頁。14点のうち、「東海日録草稿」は、平成20年に福井市立郷土歴史博物館の秋季特別展「福井藩と江戸」で展示されている（展示については、解説図録『福井藩と江戸』（福井市立郷土歴史博物館、2008年）参照）。また、14点のほか、「松平春嶽自筆紀行文残簡」（7枚）がある。
- 9) 本稿の主対象である「東海紀行」の筆名には、号の一つである「春嶽」を使用している。そのため、本稿もこれに従い、「慶永」ではなく、「春嶽」に表記を統一する。
- 10) 同年以前より、春嶽は、將軍継嗣問題や条約勅許問題などで、幕政を主導していた大老井伊直弼らと対立を続けていた。そして、同年の4月25日に参勤（5月11日江戸着、東海道経由）した後の翌5年7月5日、不時登城を理由に隠居・謹慎を命ぜられ、糸魚川藩から松平直廉（茂昭）を養子に迎えて家督を譲った。そのため、安政4年の参勤が、春嶽の最後の参勤交代となった。
- 11) 展示については、当館ウェブサイト「展示・講座」ページ内の当該展示ページ参照。
- 12) 忠田敏男『参勤交代道中記－加賀藩史料を読む－』（平凡社、1993年）18～19・27頁。
- 13) 福井県立図書館・郷土誌懇談会共編『続片響記 中』（福井県郷土叢書 第3集、福井県立図書館、1956年）34頁。
- 14) 印牧信明「福井藩の参勤交代に関する基礎的考察」（『奈良史学』29号、奈良大学史学会、2011年）、初出は前掲注8『福井藩と江戸』。
- 15) 福井県立図書館保管松平文庫「奉答紀事 上」（福井県立図書館資料番号219(仮79)－1、福井県文書館資料番号 A0143-01260・複製本番号 A4537）卯ノ十三丁。『奉答紀事』（東京大学出版会、1980年）22頁。「奉答紀事」

は、御側御用人を務めた中根雪江(靱負)が、明治6年(1873)から3年をかけて書き上げた旧主春嶽の伝記である。なお、本資料は、中・下とあわせて『奉答紀事 春嶽松平慶永実記』(新編日本史籍協会叢書1、東京大学出版会、1980年)として刊行されている(当該記述は22頁)。

- 16) 福井県立図書館保管松平文庫「少傅日録抄(慶永付側向頭取日記、在府)」(天保9年(1838)9月~翌10年12月)(福井県立図書館資料番号706(M24-2)、福井県文書館資料番号 A0143-01106・複製本番号 A4388)。
- 17) 松平春嶽全集編纂刊行会編『松平春嶽全集(3)』(原書房、復刻版1973年)60頁。「政事日録」は、弘化2年(1845)7月15日から同月22日までの8日間の日記。15日は実弟鑑丸(後の慶臧、同年3月25日に尾張藩徳川家へ養子入り)の尾張藩江戸上屋敷(市ヶ谷屋敷)への引越しの当日、22日は鑑丸の先代斉荘の死去の翌日にあたる。なお、春嶽は、「政暇日録」(一部は「政暇日記」という、同じ7月15日から翌々4年3月6日までの1年8か月間の日記も残している(『松平春嶽全集(3)』、および『同(4)』(原書房、復刻版1973年)所収)。
- 18) この頃、福井藩は、藩に招聘しようと築山にかけあっていた。築山はこれを固辞したが、その後も講義は変わらずに続いている。
- 19) 松平春嶽全集編纂刊行会編『松平春嶽全集(1)』(原書房、復刻版1973年)36頁。
- 20) 『福井藩士履歴 2 お〜く』(福井県文書館資料叢書10、福井県文書館、2014年)164頁。『福井藩士履歴』は、平成29年3月末時点で、全6冊中5冊までが既刊。なお、出典は、「剥札」上・下と「士族」1~7(「かよたれそ」)が欠けているため、欠分「か」は「(士族略履歴)」、「御医師御鍼医御目医師御外科」、「御茶道御絵師御儒者御馬方馬医御鷹方御餌刺御鶴匠蘭学方英学方」、「そ」は「(士族略履歴)」、「た」は「旧藩制役成」で補完)である(すべて福井県立図書館保管松平文庫)。
- 21) 前掲注16「奉答紀事 上」戊ノ三丁、同『奉答紀事』4頁。
- 22) 前掲注16「奉答紀事 上」己亥ノ四丁、同『奉答紀事』6頁。
- 23) 前掲注16「奉答紀事 上」戊ノ二丁、同『奉答紀事』3~4頁。
- 24) 前掲注5『春嶽公記念文庫解説目録-文書編-』8頁。
- 25) 『福井藩士履歴 3 た〜ね』(福井県文書館資料叢書12、福井県文書館、2016年)83頁。
- 26) 前掲注18「政暇日録」の弘化2年10月11日条に「敬臨館少々風邪ニ付、薬服用カコントウ。」とある(『松平春嶽全集(3)』202頁)。
- 27) 資料の見返しには「水府」、墨付の一丁目に「越國文庫」という蔵書印がある。松平文庫でもこれらの蔵書印が確認できるが(前掲注3『資料目録』127・128頁参照)、印の意味やこの蔵書印がある資料の扱いについては未詳。
- 28) 前掲注20『松平春嶽全集(1)』88頁。なお、第2編は、初編の成立から2年後の明治16年(1883)成立。
- 29) 前掲注5『春嶽公記念文庫解説目録-文書編-』9頁。